

漢字と文化

漢字文化の全き繼承と發展のために

京都大學 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點

第 8 号



雲岡石窟第20洞大仏拓本作業

目 次

「ショオ文字」の試み	2
中央研究院歴史語言研究所逗留記	5
漢字文献とアフガニスタン古代史	7
越境草卒——院研究漢喃訪問	10

「ショオ文字」の試み

中西裕樹

ここ数年、年に一〜二回、一ヶ月ほど中国広東省東部・中部地区に出かけている。目的は当地の言語および民俗の調査で、東は海豊県から西は増城市までのベルト上の地域を、その時々調査項目にあわせて回っていく。調査対象はミャオ・ヤオ系のショオ族という少数民族が中心で、その周囲に住む漢族も併せて調査している。筆者の調査地域のショオ族は、それぞれ百人から数百人を単位とした村落を形成しており、すべてをあわせても1500人強で、周囲を圧倒的多数の漢族に囲まれている。彼らを外見から漢族と見分けることは難しい。民族衣装や独特の家屋・食物などといったものもなく、一般に考える少数民族の調査というイメージからはほど遠い。

ショオ族は主に中国の浙江・福建・安徽・江西・広東に住んでおり、人口は2000年の統計で709,592人。その大部分が「中国語の方言によく似た言語」を話し、広東省の海豊県・恵東県・博羅県・増城市に居住するおよそ1500人のみが民族固有の言語であるショオ語を保持している。これは人口比にして0.2%程度であるから、ショオ語はまさに消滅の危機に瀕した言語であると言える。グローバル化が世界の趨勢なら、少数者の保護もまた世の流れのひとつだ。ユネスコが2001年10月の総会において「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を採択したのはその一例である。なぜ少数言語を保護しなければならないのか、なぜ言語の多様性が文化や生物の多様性につながるのかということについては、すでに多くの著作があるのでここでは触れない。以下、少数言語の保存を目的としたささやかな活動を紹介したい。

言語の保持に必要な条件とはどのようなものであろうか。適当な人口、そして言語コミュニティ

の政治・経済力は言うまでもないだろう。ほかにもさまざまな要素が考えられるが、忘れてはならないのは話者の言語への愛着である。日本でも、普段は標準語を使っている、昔の友人と久しぶりに会ったら方言がぼろっと出てきてなんだかほっとしたとか、子供に話しかけるとときにはどうしても方言になってしまうとかいった経験がある人は少なくないと思う。言語への愛着はその言語を失いたくないという気持ちにつながる。言語コミュニティ内部からの動きがなければ、いくら外部の人間が言語保存を叫んでもうまくいくはずなどない。少数言語の話者は、社会的・政治的・経済的環境によって、自らの言語を価値がないもの、無意味なものと考えがちである。こうした状況においては、母語に対する愛着が下の世代に伝わるかどうかということこそが、その言語の命運を握っていると言っても過言ではない。

ショオ語の調査に通いはじめて二年を過ぎた頃、発話協力者である海豊ショオ族のLさんに、それまで国際音声字母（IPA）を使って記録してきた資料を何とかショオ族が読める形にしたいということを出した。本来の目的から言えば、そんなことを考えずとも、言語の記述をさせてもらい、そのデータを持ち帰って研究ができればそれで事足り、だったはずなのだ。しかし、現地調査では事前に予想もできなかったような深い交流が生まれる。調査者とインフォーマントとは一ヶ月もの間ほぼ朝から晩まで顔をつきあわせることになる。だんだんお互いの性格が知れ、自分との相性も飲み込めてくる。そしてLさんと筆者はあまりにもウマが合ってしまったのである（ちなみにLさんは四十代の男性）。調査の合間に彼の母語への愛情について聞かされ、以前調査に来た研究

1. 声母

国际音标	畬文	例子
p	b	ba 三
p'	p	pǔn 花
m	m	mǎ 有
f	f	fā 烧
v	v	vá 抓
t	d	dī 酒
t'	t	tà 死
l	l	lì 穿 (衣服)
ts	z	zā 盐
ts'	j (i-)	jī 洗
	c	cà 席子
s	q (i-)	qì 是
	s	sa 收拾
z	x (i-)	xí 红色
k	r	rí 八
k'	g	gā 路
ŋ	k	kuà 手
h	ng	nga 石头
∅	h	há 不
	不标	á 哑

国际音标	畬文	例子
i	i	bi 五
u	u	u 二
ai	ai	cai 腥
uai	uai	guǎi 怪
oi	oi	goǐ 肉
ui	ui	buī 猪
au	ao	pāo 泡沫
iau	iao	tiáo vù 跳舞
iu	iu	piu 吹
an	an	zân 帽子
ian	ian	jiān 拥挤
uan	uan	guan 甜
in	in	pīn 浅
un	un	pǔn 花
iun	iun	kiún coǐ 芹菜
aŋ	aŋ	vàng 我
iaŋ	iaŋ	giang 黑
uaŋ	uaŋ	guǎŋ 天空
ɤŋ	eng	měŋ 你
oŋ	ong	dóng 树
ioŋ	iong	bióng 叶子
iŋ	ing	nging 爱
at	at	at 恨
iat	iat	giat (味道) 涩
uat	uat	guat 刮 (胡子)
it	it	pīt pó 蛾
ut	ut	mút 枯
ak	ak	lak 溪
iak	iak	biák sêk 壁虎
ɤk	ek	dek níŋ 嫩
ivk	iek	ngiék 玉
ok	ok	lok (蚕) 茧

2. 韵母

国际音标	畬文	例子
a	a	ba 三
ia	ia	bià 鱼
ua	ua	kuà 手
e	ee	bee 知道
ɤ	e	bē 丈夫
o	o	bo 被子
io	io	biō 跑

図1 「シヨオ語ローマ字化案 (部分)」

者に比べてお前は調査の仕方が細かいなどとお世辞（耳が悪いことに対する嫌味？）を言われている間に、文字のようなものを作ったらLさんに恩返しができるだろうかという不純な考えが脳裏を横切ったのだ。筆者のこの提案はLさんによって想像以上の歓迎を受け、早速共同で文字を作ることになった。まず問題となったのは、どのような文字種を使うかということだった。漢字を使い、日本語の訓読みのようにシヨオ語音で読んでいくことも考えられなくはなかった。その場合には方言によって表記を変える必要がなく便利だが、どちらにしても音声を何らかの形で示す必要がでてくるし、シヨオ語と中国語の間に存在するニュアンスの違いが漢字の陰に埋もれてしまう可能性

があるので、漢字はやめておくことにした。そうになると現地の人が比較的親しんでいる文字という観点から、選択肢はローマ字しかない。シヨオ語は中国語、特に客家方言の影響を大きく受けており、音節構造が周囲の客家方言にそっくりに変化している。そこで、中国語の発音記号であるピンイン符号を使うことにした。この方式の利点は、ある年齢以下の人ならピンインを習ったことがあるので、習得が容易なことだ。それまでの調査で帰納したシヨオ語の音素にピンインを当てはめていくのは思いがけず楽しい作業だった。共通中国語にないいくつかの分節音は、複数の記号で表すなど工夫した。六つの声調は共通中国語より二つ多いだけなので、ひとつには山型の符号をつけ、



図2 「第1回四縣市ショオ族交歓会にて」
民族衣装は近年増城ショオ族が作り出したもの。村役場に数着あるだけで、普段は誰も着ていない。

もうひとつは声調符号なしで済ませることにした。こうしてできた文字案を用いて記録済みの物語を書き表し、Lさんをはじめとするショオ族の友人たちに読んでもらい、不都合があれば修正という作業を数回繰り返し、ほぼ一年後にショオ語ローマ字およびIPAで表記した語彙・例文集を出版した。

こうしてショオ語をローマ字化するという作業は一段落したが、残された課題は少なくない。ひとつは、このローマ字がショオ語の海豊方言にしか対応していないという点である。筆者は現在、ショオ語の残り三つの方言に関しても記述研究を進めているが、最終的にはどの方言にも使えるよう修正を加えるつもりである。もうひとつは、この文字を使いこなせるようになるには、相当の訓練が必要となるが、今のところそのための教材も教員も存在しないということである。ピンインを使用したため習得が容易だと上述したが、それは簡単に読めるというだけだ。彼らは母語話者であるから、ピンイン自体を正しく発音できなくても、音の形をイメージできさえすれば、意味を察して読むことができるのである。しかしながら、自分の発音を声母・韻母・声調に分解して、それを書き表すというのは想像以上に難しいらしく、Lさ

んですら怪しい部分がある。ただ、この点に関して筆者は楽観的である。先ほど述べたように、言語の保存のためには、まず若い世代に母語への愛着を持ってもらうということが何よりも大切であるからだ。この点から考えると、正確に書き表すことは今のところそれほど重要ではない。大切なのは、印刷された文字を読むと自分たちの言語が眼前によみがえってくる、という実感だ。これはまさにアイデンティティの確認とも言うべき体験となってくれるだろう。とりあえずは、書けなくても、読むことができるようになることが重要であるというゆえんである。上の世代でしか使われなくなった古い言い回しも、彼らが読める形で記録さえしておけば民族の文化遺産として保存され（調査者の責任は重大であるが）、再び使用される可能性が出てくるのである。もちろん、これは書くことを放棄するということではない。将来的には、教材を作って教育を行なうことも考えられる。

さて、ショオ語を保持しているショオ族の間には、これまで交流というものはほとんどなく、それぞれお互いの存在は知っていても、生活や言語・風俗がどのような状況にあるのかはわからないという状態にあった。ところが、上述のLさんの尽力によって交流の必要性が広く認められるようになり、2005年の旧暦7月14日、盤古王のお祭りの日に、増城市ショオ族村で四縣市（海豊県、恵東県、博羅県、増城市）のショオ族の代表が集まって第一回の交歓会が開催された。席上、メインの話題はご多分にもれず経済的な問題だったが、彼らを結びつけるアイデンティティとして、ほぼ唯一のよりどころとなっている言語の保存についても言及があった。こうした交流がきっかけとなって、彼らが自らの言語文化により多くの関心を持ってくれることを期待したい。外部の人間、ましてや外国人である筆者にできることは限られているが、要請に応じていつでも協力できるよう研究を進めることが自分の役割ではないかと思う。まだしばらく広東省への旅は続きそうである。

中央研究院歴史語言研究所逗留記

永田知之

去る2005年12月18日から翌年1月14日にかけて、京都大学人文科学研究所（以下、人文研と略す）と台湾中央研究院歴史語言研究所（同じく史語所）との間における交流協定に基づき、人文研附属漢字情報研究センター（センターと略す）助手である筆者は史語所を訪問・滞在する機会に恵まれた。この交換派遣制度は2004年から始まったもので、2005年度はその第二年目にあたる。

史語所については、センター広報誌『漢字と情報』No.9所載の佐野誠子さんによる「中央研究院歴史語言研究所訪問記」や本誌第5号の鍾珮氏「臺灣中央研究院歴史語言研究所見聞録」で既にお馴染みの読者も多いことだろう。実際、それらに付け加えるべき言葉を筆者はもたない。拙文は零細な記憶の寄せ集めと思っていたきたい。

中央研究院は台北市内南西部の南港区に位置する。少し見渡しただけではどこまで続くのか、すぐには見当もつかないほど広大な土地に、史語所を始めとして文理双方の三十を超える研究所・研究中心の建物が林立している。体育施設や噴水付きの池まである敷地は市民公園に見まがうほどであり、現に人々の憩いの場ともなっている。

筆者が四週間を過ごした宿舎も同じ敷地内にある。^{ジブッシュンダン}「鷄不生蛋」（ニワトリも卵を産まねえ）とは周辺にわずかな民家と商店しか無いその「辺鄙さ」を内部の口さがない人々が称する言葉だ。しかし中央研究院の内部には各種設備が揃っていて、不自由を感じることはまず無い。市営バスや地下鉄を利用すれば、市街地まで出て行くのも、実に容易であった。

一ヶ月未満の滞在でありながら、宿泊用の部屋に加えて、史語所の建物内に研究室まで貸与されたのは驚きであった。そこを拠点に史語所の傳斯

年図書館、中国文哲、近代史、民族学の諸研究所附属の図書館を回って、資料を閲覧・複写するのが日課となった。出版地を問わぬ蔵書の豊富さ、学生以上ならば国籍を問わず誰でも入館できるという開放ぶりは並大抵のものではなかった。

日本書の揃え方も良好で、近年の研究書（少数の発行で古書でも入手困難なものを含む）は、我が国の平均的な研究機関以上に揃っていたといっても過言ではない。ただし、以前と比べて書籍購入費に恵まれない日本の実情を考えると、異国の地でそれらのコピーにいそむ自らの姿に釈然としない思い無きにしもあらずではあったが。

中央研究院での資料収集が一段落した後、次は外部の図書館へ打って出た。共に単純な手続きで入館可、台湾大学と国立政治大学は完全開架式、国家図書館も頼めばすぐに本を出してくれる。複写は専用カードを購入して自ら行う、そこに特段の制限は無い。各機関のホームページに見られる「納税者のためにできる限り尽くしたい」という意味の言葉は決して嘘ではなかった。故宮博物院図書文献館に至っては、「納税者」ならぬいちげんの外国人飛び込み客に明版（嘉靖刊本）を見せてくれたほどで、その度量には敬服のほかない。

台湾における中国学専門書の流通状況についても一言ふれておこう。台北市内に書店は多い。中国学関連の書籍も少なしとしない。各種割引制度をを導入している店もある。それらは筆者も度々利用させてもらった。特筆すべきは、「簡体字書」と称される大陸書を専門に扱う書店の存在だ。

この種の大陸書取扱店は2003年7月より簡体字で表記された学術書の台湾における販売の解禁に伴い、今日の台北市ではもはや珍しくない。中国学関連書を専門とする小売店は、やはりというべ



史語所歴史文物陳列館

きか台湾大学、台湾師範大学の近辺に概ね集中している。現に筆者は台湾へ「兩岸三地」の専門書を買出しに来た日本人研究者にも遭遇した。その方いわく、「大陸に行くのとは違って両方の本が一度で手に入るから」。各書店でレートは異なるが、大陸元の価格掛ける4、5倍で台湾ドルに換算されるのが、大体の相場である。大陸で買うのとあまり差は無いといえよう。大陸と何か特別なルートでも無ければ不可能な価格であろうが、それにしても利益の薄い商売だ、とその恩恵に与るこちらの方が心配になってくる。事実、購買層は限られているので、競争も激しいらしい。「‘いつの間にか無くなった本屋’ というのはざら」とは台湾に長期滞在している日本人の弁である。

もとより大陸の都市部と比べて数ヶ月から半年ほど流通の遅れがあるという事実は否定できない。しかし現地の研究者も認めるとおり、簡単に大陸の専門書が入手できるようになったことは台湾の中国学界にとっては大きな変化であり、その影響は各分野で既に現れつつあるという。

『漢字と文化』への寄稿であるから、筆者が現在、従事している「唐代研究ナリッジベース」に関連する事柄も述べておかねばなるまい。筆者の専攻が唐代文学だと知った史語所の諸氏は「せっかく来てもらったのに」と口を揃えていた。それというのは台湾の唐代研究は、哲学・史学・文学の諸分野を通して、以前ほどの活況にない、と彼らが実感しているからである。中国文哲研究所を

例にとってみよう。概していえば、宋代以降、殊に明清文学に関しては、人材も豊富で相当な力が注がれている。これに対して唐以前の詩文については、ほとんど人員が配置されていない。中央研究院のみに見られる現象かといえ、むしろ台湾の中国学全体を通じていえる傾向のようだ。

その原因は色々考えられるだろうが、ここ十数年で大家の退休、或いは物故が相継いだのが大きい、それが台湾人研究者たちの一致した見解であった。外国人があれこれいう問題でもあるまいが、台湾の唐代研究が早くこの「端境期」を脱するよう祈りたい。

年末年始という時期のためもあったか、通常は頻繁に開かれているらしい学術講演会に参加できたのは一度だけである。ただ、席上において講演者の戴燕氏（中国社会科学院文学研究所研究員）やその御夫君で共に来台された葛兆光氏（清華大学歴史系教授）ら旧知の大陸人研究者と思いがけず再会できたのは楽しい思い出であった。

研究院長の李遠哲氏（1986年度ノーベル化学賞受賞者）主催による外国人研究者とその家族の交歓会に出席して分かったのだが、台北には自然科学専攻の日本人も多く滞在していた。漢語圏たると否とを問わず海外との学術交流—そもそも筆者の受け入れがそうなのだが—は中央研究院が最も力を入れている事業の一つと見受けられた。

すっかり散漫な文章になってしまった。読者諸氏におかれては先刻ご承知の事柄も多からうが、昨年までの筆者と同じ「台湾経験の無い中国学の徒」である方にはいくらかお役に立つかもしれない。台湾での図書館と書店巡りの日々によって得られたうずたかい資料の山は、帰国から何ヶ月もたった最近でもなお消化できておらず、筆者にとって贅沢な悩みの種となっている。

ともかく同時期の日本が記録的な大雪に見舞われたのとは対照的に南国特有の麗かな陽光の下、愉快的気分を年を越させてもらった、これだけは確かである。台湾での貴重な経験を今後の研究に生かせるよう勤めていきたい。筆者の台湾行きに関して様々にご高配を賜った史語所と人文研の各位にこの場を借りて深甚な謝意を表する。

漢字文献とアフガニスタン古代史

稲葉 穰

本 COE プログラムは、主要プロジェクトの一つとして、漢字文献データベースの発展形としてのナリッジベース作成を推進している。ナリッジベースの概要については本ニューズレターの創刊号において井波陵一、クリスチャン・ウィッテルン両氏による解説があるので、ついてご参照いただきたいが、そのもととなる漢字文献の電子化は、我が国のみならず本家中国・台湾において非常に精力的に進められている。様々な評価はあるだろうが、このような文献の電子化が漢字文化圏に関わる研究に大きな変化をもたらしたという事実自体は否定しがたいであろう。ここでは、このような成果が、漢字文献を専門に扱う研究者のみならず、漢字文化圏の周辺あるいはその外部にかかわる研究に対しても一定の意義を有していることを述べてみたい。

筆者の研究領域はイスラーム化前後のアフガニスタン地域の歴史であり、それだけを聞くと漢字文化圏とはなんの関係もないように思われるが、実はそうでもない。

現在のアフガニスタンが国家としての体裁（と言ってしまうとやや不正確かもしれないが）を整えるのは随分と新しく、18世紀末のことである。その後この地域においてイギリスとロシアがいわゆるグレートゲームを繰り広げ、冷戦時代には東西両陣営がこの地を巡って対立したというあたりの事情は、9.11事件を発端として、この5年ほどの間、なんどもメディアに紹介されているので、いまさら字数を費やして解説する必要もなからう。ところで、アフガニスタンに「アフガニスタン」国家が未だ存在していなかった古い時代から、一貫してこの地域の特徴であったのは、ここが中央アジア、西アジア、南アジアという三つの歴史世

界、文化圏の接点となっていたことである。紀元前の時代から、アフガニスタンを中心に中央アジアと南アジア、あるいは中央アジアと西アジアにまたがる領域を支配した国や勢力もいくつか出現している。

この地域にイスラーム教徒がはじめて到達した7世紀を挟む150年ほどの期間、しかしながらアフガニスタンを中心として東西南北に強力な政権を築くような勢力はなかった。それに代わって、西ではウマイヤ朝やアッバース朝が、東では唐朝が、ともに中央アジア方面に勢力を伸張させていた。その一つの帰結として西暦751年、（実態以上に）有名なタラス河畔の戦いが起きた、というのもよく知られていることである。唐のいわゆる西域支配は、この戦いの直後に生じた安史の乱をきっかけに終わりを告げるが、その直前、7世紀後半から8世紀初頭にかけては、中国側の文献に中央アジア方面に関する事柄がかなり詳しく記録され、アフガニスタン地域もその最も西側の領域として言及されている。

一方、アラビア語やペルシア語の史料はどうかというと、これが悲しくなるほど記述が乏しい。そもそもイスラーム世界で書かれたアラビア語やペルシア語の年代記史料の中で、現存している最も古いものも、それが書かれたのは9世紀であり、いくつかの例外を除いてその記述の主眼はイスラーム世界の当時の中心地であるシリア、イラク、エジプト地域にある。かつて我が国の誇る先学達は、漢語史料に対する驚嘆すべき博識・精通と、アラビア語、ペルシア語資料を用いた、ヨーロッパの学者による当時の最新の研究をもとに、いわゆる「西域研究」「東西交渉史研究」という分野を確立し、我が国のみならず世界の学界に大きく



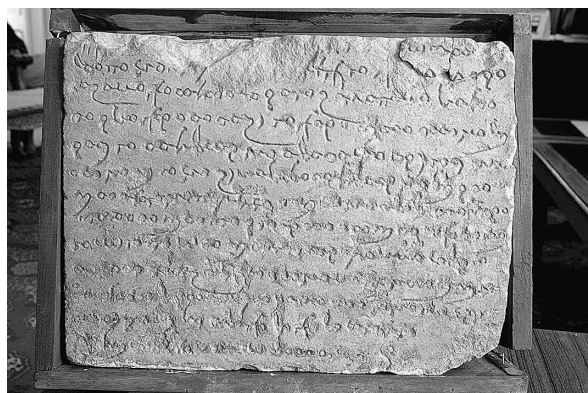
Tang-e Safedak 寺院址（龍谷大学アフガニスタン学術調査隊撮影，2005年）

裨益したが、その研究の中で西トルキスタンやアフガニスタン地域の歴史も言及されている。それでもいかにせん史料があまりにも希薄すぎた。わずかな曙光に見えたヨーロッパや日本による考古学的調査も、1979年に始まるソ連軍の侵攻および、その後の内戦によって、20年余りも途絶していた。

しかしこの地域の古代史に関する epoch making な発見は、内戦が未だ激しかった1990年代に生じたのである。アフガニスタン北部から発見されたといわれる大量のバクトリア語文書や、8世紀の紀年を持つバクトリア語碑文が残るタンゲ・サフェーダク寺院址など、驚くべき遺物、遺跡が次々と発見されたことにより、アフガニスタン古代史研究はあらたな局面を迎えた。これらの新発見資料は、既存の文献資料からは全く知られていなかった、当時のアフガニスタン北部の社会状況について、多くの新しい知見をもたらしてくれたが、それでもそれらに立脚して歴史を再構成するためには、拠って立つ柱となるべき材料が必要であった。もちろんそこで用いられたのはアラビア語、ペルシア語の文献史料と、漢字文献である。新しい材料を手がかりに、これらの文献資料に現れる断片的な記述を組み合わせ、新たな歴史像を描く作業が、現在世界各地でリアルタイムで進行している。

前置きが長くなったが、このような状況下、漢字文献の専門家ならざる身でも、手がかりをもと

めてそれらを調べなければならないという事態が生じている。筆者も本貫はペルシア語やアラビア語史料の解読であるのだが、玄奘の『大唐西域記』のごとき旅行記や、『大蔵経』におさめられる僧伝、あるいは両『唐書』、『唐会要』、『資治通鑑』などといった史料に目を向けざるをえない。以前は手がかりとなる固有名詞などを求めて片っ端から史料をめぐったりもしていたのだが、悲しいかな漢文がちゃんと読めるわけでもない身には非常に大変な作業であるし、見落としも多くなる。しかし、現在ではこのような用途のために使えるデータベースがいくつかアクセス可能となっているのである。ある程度こつをつかんでしまうとこれは大変便利である。



Tang-e Safedak 出土バクトリア語碑文（カーブル博物館蔵，龍谷大学アフガニスタン学術調査隊撮影，2005年）

そもそも一般論としても、一人の人間が様々な言語で書かれた文献に全て熟達するというのは、もちろん例外はあるが、通常では困難である。一方で歴史研究そのものは、単一の地域の単一の時代、社会に関する詳細な研究にとどまらず、異なる地域間の比較であるとか、異なる歴史文化が接触した境界領域の研究へと方向を拡大しつつある。西アジアや南アジアの歴史を専攻する者が東アジアや東南アジア、あるいはヨーロッパ世界の歴史を学ぶというのはそう珍しいことではなくなっている。しかし、上にも述べた制約により、他地域に関しては、信頼しうる二次史料に基づかざるを得ないことも多い。それでも自ら一次文献をチェックできればそれにこしたことはないはずである。

アフガニスタンのように複数の歴史文化が接触し、どの文化世界からも辺境であり、その結果、文献資料に非常に乏しいような場所は、特に多様な材料を用いて研究を進めざるを得ない。たまたま日本人である筆者は、どうにか漢和辞典ぐらいはひくことができる。そのような人間でも一次文献の個別の具体例にアクセスすることを、漢字文献データベースは可能にしてくれているのである。

もう一つ、このようなデータベースや電子テキストの恩恵について書いておきたいことがある。ネットワークに常時接続していることが普通である時代に生きているお陰で、そのような電子テキストのいくつかには研究室にいながらにしてアクセスすることができる。これは筆者のような出不精の怠け者にとっては極めてありがたい状況である。研究のためであれば、わずか一行の記述であってもそれを求めて遠く旅し、現物を目視する、というのが研究者のあるべき姿なのかもしれないが、一方でそのような状況は、あまりに頻繁であると思いのスピードを殺いでしまうのではないかと思うことがある。通常我々は様々な史料を読み、研究文献に触れ、その都度いろんなことを考える。運がよければ、それまでに蓄積されていた雑多な情報の間にパツとリンクが張られ、結びつく瞬間が訪れる。何かを「思いつく」わけである。もちろん思いついただけでは不十分なので、その思いつきを様々に検証しなければならないのだが、そのような検証はできるだけ一気呵成にやってみえる方がいい。思考の連鎖反応が生じて予想外の結果を得る可能性があるからだ。

自分が専門に扱いうる文献を調べるときにはそれほど問題もないのだが、その領域を少しでも外れたことを調べる場合は、例えば一次史料の優れた翻訳があるとありがたい。余談だが、日本にお

ける中央アジア、西アジア史研究の抱える大きな問題はここにある。専門家以外でもアクセス可能な優れた翻訳の数が極めて少ないのである。欧米と比較した場合、最も立ち後れている点であろう。それはさておき、上述のように我々日本人は、幸い漢語というものにそれほど大きな拒否反応を示さずに済む。誰でも漢和辞典のひきかたくらいはわかる。漢語文献の翻訳の数も他地域の文献に比べれば多い。それに加えて、ある程度簡便に一次史料の検索が可能なのであれば、それは優れた翻訳が埋めるべき場所を補うに十分な機能を果たすと言える。

どうも怠け者の言い訳を書き連ねてしまったようで恥ずかしくもあるのだが、少なくとも筆者個人にとっては、漢字文献の電子化は研究上大きなメリットをもたらすものである。非専門家が利用できるように形での一次史料の再フォーマット、という機能をそれは果たしているように思える。このような機能に対するニーズは実は潜在的にかなり多いのではなかろうか。たとえばモンゴル時代の研究を、主に漢字文献に基づいて行っている者に対して、もし仮に主要なペルシア語文献が電子化され、検索可能となった場合にもたらされるメリットを想像して欲しい。さらに風呂敷を広げるなら、少なくとも二つ以上の異なる言語文化が接触する地域に関心を持つ全ての研究者にとって、自分の専門以外の文献の電子化がもたらす利便性と効能は決して小さくはないと思える。現在の歴史研究の対象がそのような領域に向かっていることを考えるなら、なおさらである。

言うまでもなく、情報へのアクセスが簡便であるというのは単なる条件に過ぎず、これをどう生かすかは検索する側の知識と知恵によるのだが、それはまた別の話としてここでは触れない。

越境草卒——院研究漢喃訪問

山崎 岳

ヴェトナムは漢字で越南と書く。その首都ハノイ市は河内、故ホーチミン国家主席は胡志明、抗仏戦争の古戦場ディエン・ビエン・フーは奠辺府となる。こうしたことがうすぽんやりと知られてはいても、ヴェトナムが、その長い歴史を通じてつい半世紀ほど前まで「漢字の国」であったという事実を、われわれは普段あまり意識することはない。

ASEAN 加盟国であるヴェトナムは、タイやカンボジアと同じく「東南アジア」に分類され、その他の旧漢字文化圏諸国が地理的にくくられる「東北アジア」とは異質な文化圏に属するものと観念されやすい。対米戦争で爆弾と枯れ葉剤の雨を被った「悲惨な国」のイメージが薄れつつある今日、美食に満たされ、アオザイに彩られたコロンビアルな街並みは、とりあえずエキゾチックで非日常の異空間としてファッション雑誌の紙面ににぎわす。

ヴェトナムは20世紀に入って、フランス植民地政府の下で、アルファベット表記を国語 (quốc ngữ) として採用した。その後もしばらくの間は農村部などで漢字が使用されることがあったというが、今日では寺院や史跡などの限られた場所以外で漢字を目にすることはほとんどない。日常的な必要に迫られることなく、古典教育も取り立てて盛んでない今日の状況下で、限られた記憶力を喪われた伝統の学習に費やす人は僅かにとどまる。

しかし、在越宣教師によって作られたという晦渋な綴字記号を仔細に眺めれば、ヴェトナム語には、古来漢語から採り入れてきた夥しい借用語が含まれており、ある程度の法則性さえつかんでしまえば、街中の看板におどるローマ字が何を意味するのかを推測することは困難ではない。ヴェト

ナムの漢字音は、受容の時期や地方差によって多少のばらつきはあるものの、基本的には韓国語と同様に入声や音節末の鼻音 m, n, ng の区別を残しており、唐宋の風韻を今に伝えるという意味では、聞きようによると北京方言などと比べてよほど典雅な響きをもつ。全語彙の六七割が漢語語彙だという試算もあることから、これをたよりに語彙を増やしていくならば、ヴェトナム語はある意味、日本人にとって最も身につけやすい外国語の一つであると言えることができるかも知れない。

また、漢語語彙とは言っても、日本で明治期に西洋概念を翻訳したいわゆる和製漢語の影響が、中国や韓国と比べて相対的に少なく、徹底した社会主義国であるにもかかわらず明清時代の中国語語彙がそのまま生きている場合があるのはおもしろい。例えば、学生が図書館で勉強することは、ヴェトナムでは「生員 (sinh viên) が書院 (thư viện) で読書する」ことになる。ちなみに、大学院修士は挙人 (cử nhân)、博士は進士 (tiến sĩ) と、科举制度そのままの現代語もある。

ただし、漢語からの借用語が多いとはいえ、中国語とヴェトナム語との見かけ上の相違は大きい。ヴェトナム語では、タイ語やクメール語と同様に、修飾語が被修飾語の後ろに置かれる。例えば、正式国名「ヴェトナム社会主義共和国」は、共和社会主義越南 (Cộng hòa Xã hội Chủ nghĩa Việt Nam) となる。これは共和・社会主義などの漢語語彙をヴェトナム語式の語順に並べたかえたものである。

さて、筆者は2006年3月5日から23日まで、ハノイ市およびホーチミン市において、ヴェトナムにおける漢字情報の電算化状況に関して、現地調査を行う機会を得た。ハノイ市においては、漢喃

研究院 (Viện Nghiên cứu Hán Nôm 院研究漢喃) と国家図書館 (Thư viện Quốc gia 書院國家) に調査対象を絞った。このうち漢喃研究院、通称ハンノム研究院は、政府直属の研究機関である社会科学研究院の一支部として、かつてのフランス極東学院から接収した大量の漢籍を所蔵していることで日本でもよく知られている。残念ながら先方の都合で漢籍の閲覧は許可されなかったが、同院情報技術応用科 (Phòng Ứng dụng Công nghệ Tinh học 房應用工藝信息) 研究員 Hoàng Văn Nam (黃文南) 氏に、電算化問題について中国語でご教示を賜ることができた。

漢喃研究院のホームページおよび蔵書検索システムは、目下準備中で一般公開はしていないとのことだったが、今回特別に見せて頂くことができた。書誌データとして、書名・整理記号・著者名・ページ数・形態・ABC順の書誌番号等の項目が備えられ、書名・著者名は、ヴェトナム国語表記で入力されている。ヴェトナムでも日本や韓国と同様に、漢字はあくまでも自国語として処理されており、例えば国家図書館では、漢字で書かれた日本人の名前などもヴェトナム式に音読して分類することが行われている。

漢喃研究院は漢籍と同時に、ヴェトナム固有の文字である喃字 (chữ nôm 字喃) 文献も所蔵している。1998年から漢喃両種文献のスキニングも開始され、これまでに約1,000冊、計20,000ページほどが画像化されている。また、スキニング済みの漢字文献『欽定越史通鑑綱目』および喃字文献『Tre Coc Tan Truyen』には、テキストデータと現代越南語への対訳が附せられており、その他の文献についても、漸次翻訳作業を進めていく計画だとのこと。ただし、一般公開の予定はなく、所内のみで閲覧可能となるという。

しかし、漢喃研究院による各種の取り組みにもかかわらず、ヴェトナムの古典籍電算化は決して活気溢れる状況にあるとは言えない。一つには、ヴェトナム国内における漢喃文献原典への需要がそれほど高くないことによる。今日のヴェトナム国民にとって、伝統的文字文化と意識されるべき

ものは、漢喃文献をおいて他にない。しかし、ローマ字表記法に親しんだ大半の人々にとって、その種の教養はもはや国民一般に共有されうるものではなくなっている。殊に漢字に関しては、今日では自民族の伝統文化というよりも、むしろ中国という隣国の文字に過ぎなくなりつつある。

ヴェトナム漢学の凋落とはうらはらに、最近のヴェトナムでは中国語学習熱が著しい。今日、中国語は、かつての宗主国語フランス語を凌ぐ勢いで、英語に次ぐ学習人口を誇っていると聞く。中国経済の好況にともなって、新たなビジネスチャンスが北辺の国境を跨いで行き交っており、中国語はそのままカネになる実学として、いわゆる古典文学研究とは違った意義付けがなされている。時勢はまさに、いわゆる「伝統」とは正反対の方向へ向かっているようだ。事実、「伝統」業界からの人材流出も珍しくはないようで、もと研究者が今は通訳業というケースもない話ではないらしい。確かに、漢喃研究院の職員・学生ともに、中国語学科出身者の会話能力は相当なもので、失礼な話だがいつ通訳業に転身しても食うに困ることはなかろうと見える。

中国学に限って言えば、現代中国語の学習人口が増えることは、長い目で見れば古典研究にとっても発展の動力となるだろう。いわゆる「伝統芸能」の陥りがちな師伝・学統至上主義が、現代中国という生きた現実の存在によって、常に批判にさらされることになるからである。漢学ならぬ越学にしても、現代中国語を操る新世代のヴェトナム人研究者は、ひょっとするとヴェトナムの古漢籍を中国語で読むようになるかも知れない。彼らは現代中国語という全くの外国語で、かつてヴェトナム語として読まれたはずの古文献を再読するだろう。けだし、そうした文献の書き手もまた、中国語で読み、中国語で書く者でなかったとは断言できまい。そして、現在漢字文化圏と称している地域が、うかうかしているうちに、中国語文化圏と言い換えられてしまう日は来ないだろうか？ 莫須有！かく言う筆者も、日本漢文を実は中国語で読んでいる。

Chinese Characters
and Culture



発行日 2006年 6 月30日
発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム
「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—」
住 所 〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47 京都大学人文科学研究所
電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999
e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

